



TITLE:

北宋時代の官賣法下末鹽鈔の現錢 發行法について

AUTHOR(S):

幸, 徹

CITATION:

幸, 徹. 北宋時代の官賣法下末鹽鈔の現錢發行法について. 東洋史研究
1977, 36(3): 374-397

ISSUE DATE:

1977-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153675>

RIGHT:

北宋時代の官賣法下末鹽鈔の現錢發行法について

幸

徹

緒言

一 末鹽鈔の京師現錢發行法の定着

二 末鹽鈔の優遇・酬換・亂發と京師現錢發行法への回歸

結語

緒言

統一王朝北宋の領域のうち、およそ淮水以北の華北地方と揚子江上流の四川地方とを除く華南地方は、東南地方と呼稱されているが、この廣大な東南地方には、統一以前には五代列國が割據していた關係上、華北などとは異なる鹽の供給體制が展開することとなった。此の鹽法體制を東南鹽法と呼稱するのであるが、東南鹽法は華北地方の河北鹽法・河東鹽法・陝西解鹽法や四川地方の四川鹽法などと並行してその鹽法體制の展開を遂げつつも、中央財政に對して最も高い財政的貢獻を果たすことが出來た。東南地方が人口物産の最も豊かな地方であつたことから見れば、當然のことではあつたろう。

さて、荊南に始まり吳越に終つた東南地方の五代列國統合の後には、これら五代列國の官賣鹽法を主とする鹽法體制に代つて、暫くの間は北宋の通商鹽法體制が施行されることとなった。通商鹽法の常として、海濱鹽場の官營管理と末鹽鈔の中央發行とが行われるが、此の北宋極初の頃の東南地方通商鹽法體制下にて行使された末鹽鈔は、對契丹北邊國境警備の爲の軍需糧草の納入代價の振替としてや或は京師開封府穀物納入の代價として、開封府の權貨務にて發行されるものが

多かつたようである。この通商鹽法體制下に行使された末鹽鈔は、やがて出現する官賣鹽法體制下に異なる行使制度により行使された末鹽鈔と對比する爲に、正確には通商法下末鹽鈔と呼稱すべきであろう。このようにして始められた北宋極初の東南通商鹽法體制には問題點が多かつたが、その最たるものは商人販鹽の寡占傾向やそれに伴う密賣鹽橫行の弊害であつたようである。そこで、このような試行錯誤を経た後、未だ北宋初期の至道二年（九九六）には東南鹽法體制は、官賣鹽法體制一本に統制され、その官賣鹽法體制は未永く北宋末期に至るまで百餘年間にわたつて繼續運營されることとなつた。^①

しかしながら、このようにして東南地方の全域に定着した東南官賣鹽法體制にも又運營上の問題點が多々あつた。それらは、海濱鹽場の製鹽管理の問題であり、東南地方内陸奥部に至るまでの限なき末鹽運送管理の問題であり、又更には州縣行政末端における官販鹽の配給の維持徹底の問題などであつたが、特に州縣末端における末鹽の配給には官販制度に伴いがちな煩瑣不備な問題が多々あつた。こうして、官賣鹽法體制下の官販配給體制不備の末端機構を補うべく商販小賣が容認され、商販小賣用末鹽の入手販賣許可證として、天禧元年（一〇一七）獨目の行使制度を有する末鹽鈔が發行行使されることとなつた。此の末鹽鈔は、通商法下末鹽鈔とは異つて、海濱・内陸を問わず東南地方全域の州縣官司鹽倉に提示して末鹽の支拂を受け、その区域内にて販賣するものであり、官賣鹽法體制のみに適合する獨目の行使制度を有するものであつたから、官賣法下末鹽鈔とも呼稱さるべきものである。この官賣法下末鹽鈔の創制によつて、中央財政はそれ以前には無かつた巨額の末鹽鈔發行に伴う中央財政收入を確保することが出来ることとなり、又東南地方現地官司は定格的な官販鹽と流動的な末鹽鈔行使商販鹽との主従的鹽供給方法の總合によつて、末鹽鈔制度の弊害が顯著となるまでの相當の期間は安定的な鹽法體制を維持出来ると共に、煩瑣な鹽供給の行政雜務を著しく輕減することも出来るようになった。^②

官賣法下末鹽鈔の發行については、その初期の頃には、京師權貨務發行や東南地方現地博易務發行などの多元的發行法が行われ、又同時に現錢納入發行や穀物納入發行などの多角的發行法も行われていた。このような多元多角的發行法は、

末鹽鈔創制の事情の多様さを窺わせるものではあるが、創制後の運用の間にそれは次第に京師發行と現錢發行との方向に絞られ、遂に天聖元年（一〇二三）の頃には京師現錢發行法の一本に統合されることとなった。これを時人は末鹽鈔の「見錢法」と呼稱している。この京師現錢發行法による末鹽鈔の發行額は程なく年間二百萬貫を超え、嘉祐年間（一〇五六）には四百萬貫にも達し、熙豐新法期には廣域商業抑制策によって二百萬貫程度にまで落ち込んだものの、北宋後期には再び四百萬貫を超える巨額の現錢收入を擧げる存在となっている。名高い茶法や便錢法やその他の中央財政現錢收入法の總べてを大幅に超える長期安定的な中央財政現錢收入額である。何が末鹽鈔の京師現錢發行法をかくも助長育成したのであろうか。中央財政利便による財政誘導策の結果というだけでは理解し難い末鹽鈔發行額の成長であり、廣域流通商業の京師—東南地方間送錢利便の問題を大きく考慮に入れねばならない所以である。

ところで、末鹽鈔の多元多角的發行法から京師現錢發行法への統合の時期に、これと全く並行して、それまでは北方邊境軍需糧草交鈔に對する振替發行が主であった茶鈔の發行についても、同じく天聖元年から「貼射法」と稱される京師現錢發行法が行われるようになったことは注目すべきである。^⑧此の茶鈔の京師現錢發行法採用を機として、茶鈔はそれまでの北方邊境糧草交鈔に對する支拂という財政需要によってのみ發行される亂發の弊害を脱することが可能となり、京師中央財政は末鹽鈔の現錢發行法と同様に、巨額の中央財政現錢收入を擧げ得ることとなったが、又一方では邊境軍需糧草交鈔に對する支拂には、別途支拂策を立てねばならなかったことにも留意しなければならない。これらの末鹽鈔や茶鈔の京師現錢發行法の成立と並行して、同様に年間三百萬貫近くにも達する巨額の中央財政現錢收入を擧げていた京師—東南地方間便錢鈔の存在も考察しなければならない。便錢鈔は末鹽鈔や茶鈔のような物資手形ではないが、送錢手形として同様に巨額の中央財政現錢收入を擧げていた點が、末鹽鈔や茶鈔の現錢發行法の展開と關連して問題となつて來るのである。

此のような末鹽鈔や茶鈔の現錢發行法と便錢鈔との並行運用によつては、中央財政は年間數百萬貫の巨額の現錢收入を擧げ得ることが考えられるが、又同時に、それまでは主として茶鈔や便錢鈔に負わせていた邊境糧草交鈔に對する相當巨

額の支拂の整理操作の問題が残ることも忘れてはならない。ともかく、末鹽鈔現錢發行法の成長と茶鈔の現錢發行法への切替による京師現錢收入の急増は、この邊境糧草交鈔に對する支拂を合理的に現錢によって支拂うことを可能とさせ、それまでの邊境糧草交鈔に對する茶鈔の優遇振替發行というような財政經濟的損失弊害を大いに是正することに成功した。これが北方邊境糧草交鈔に對する現錢支拂法の成立である。^④このように、單に「見錢法」と稱されるものにも、末鹽鈔や茶鈔の京師現錢發行法があり、その中央財政現錢收入の支拂面として、邊境糧草交鈔に對する京師現錢支拂法があつたことが知られよう。

さて、末鹽鈔・茶鈔・便錢鈔などの現錢發行法とそれに対応する邊境糧草交鈔に對する現錢支拂法の成立は、當然現錢發行法による現錢收入と現錢支拂法による現錢支出との均衡を求める。現錢法への切替が遅れた茶鈔の現錢發行法の施行は、このような現錢收支均衡の目的の上に爲された觀がある。京師現錢收支對應均衡策の必要となる所以であるが、「見錢法」とは廣くはこの現錢收支對應均衡策の意にもとれる場合がある程である。ところで、問題はこの京師現錢收支對應均衡策の收入面についてであるが、邊境糧草交鈔に對する支拂額は年間三・四百萬貫を前後する程度であるのに對し、末鹽鈔・茶鈔・便錢鈔の收入額は計數の上では各々二百萬貫強の計六百萬貫以上にも達する狀況では、一見現錢收支對應均衡策は極めてゆとりを持って運營され、邊境糧草調達については餘裕があり、末鹽鈔・茶鈔などの物資手形は商業的需要に沿って健全な展開を遂げ得るかのように見える。しかしながら、末鹽鈔・茶鈔・便錢鈔などの行使の展開過程は必ずしも長期安定的ではなく、北方邊境戰爭に伴う財政難の影響などは一應論外に置くとしても、各々の量的質的展開には發展と没落との著しい差異があつた。便錢鈔は天禧年間の頃から著しく縮少して、熙豐年間の相當な復活を除いては衰微の極を辿り、茶鈔は現錢發行法維持困難の低落過程を経て、嘉祐年間には年間數十萬貫程度にまで激減し、末鹽鈔のみが北宋末期まで年間三・四百萬貫程度の收入額を保って、長期安定的展開を遂げるのが實情である。

本論考は此のような末鹽鈔・茶鈔・便錢鈔などの交鈔類の京師現錢發行法の形成と盛衰の過程を邊境糧草交鈔に對する

京師現錢支拂法との對應關係に於いて考察し、それらを總合する京師現錢收支對應均衡策の推移運用を考察し、延いては特にその收入面の交鈔類發行・行使の變動や變動の原因などを南北廣域流通經濟の基盤の上に考察したいとするものであるが、本稿では、先ず末鹽鈔についてその京師現錢發行法の形成と推移の過程を邊境糧草交鈔に對する京師現錢支拂法との對應關係に於いて考察するものである。

一 末鹽鈔の京師現錢發行法の定着

東南地方の官賣鹽法體制下における官賣法下末鹽鈔制度の創制は、天禧元年の京師樞貨務の末鹽鈔發行開始によって確認されるが、此の創制期の末鹽鈔の發行法には京師發行や東南地方發行があり、夫々に現錢の納入による現錢發行や穀物等の納入による物資發行もあつて、末鹽鈔の發行は多元多角的に行われていた。この多元多角的發行法がその後次第に京師現錢發行の一本に統合されて、京師物資發行や地方發行などは縮小廃止され、天聖年間の初めには京師現錢發行法のみが末鹽鈔の發行法として行われることとなつたのである。このような末鹽鈔の京師現錢發行法の成立過程は別考の通りであるが、この考察を踏まえた上で、京師現錢發行法の成立年次を強いて確認すれば、それは天聖元年ということになる。⑤ というのは、續資治通鑑長編卷一百十三明道二年是歲の條に

先是天禧初、募人入緡錢粟帛京師及淮南江浙荆湖州軍易鹽。乾興元年、入錢貨京師、總爲緡錢一百十四萬。會通泰煮鹽歲損、所在積儲無幾。因罷入粟帛、第令入錢。

とある記事によつて、粟帛などを入納させる物資發行法を廢止して現錢發行法のみに統合したのは、末鹽鈔の發行額統計を整理した乾興元年の恐らく翌天聖元年であると推定されるからである。茶鈔の京師現錢發行法の成立もこれと同年の天聖元年であるということは甚だ興味深いことである。残された現錢發行法の中には、理屈の上では地方現錢發行も含まれるが、それは南北廣域商業にとって利益が少いから、殆ど無かつたと考えても良さそうである。

このようにして成立した末鹽鈔の京師現錢發行法は、その後は明道二年の參知政事王隨の通商鹽法建言に至るまで、ほぼ十年間は原則的にはそのまま運営されている。しかしながら、此の間、形式的にも内容的にも完全な京師現錢發行法のみが行われていたのではなく、極く若干の京師物資發行や邊境糧草交鈔に對する振替發行を意味する「翻換」發行が、京師現錢發行に準ずる内容で容認されていたのを見逃すわけにはいかない。^⑥ 例えば、宋會要輯稿食貨三六權易天聖八年十一月の條に

三司言。……（中略）……。今秋豆粟價賤。勘會、馬料粟豆見在數無多。欲於在京折中倉、許客人中大豆三十萬碩粟二十萬碩。一依舊例、除依時估價例、每斛上添饒錢十文紐算價錢。每一百貫爲則、內七十貫算請解州願鹽。即依在京入納見錢體例、每七百文支一貫文引。三十貫支向南州軍末鹽。即鹽上更不減價、亦無加擡。所有上件末鹽三十貫文、更於權貨務貼納見錢三十貫文、亦依本務納見錢體例、每貫上加擡錢八十文、共六十二貫四百文、給向南末鹽交引。どあつて、「支向南州軍末鹽」や「給向南末鹽交引」と記されているのは、相當煩瑣な付帶條件はついていても、ともかく京師納入の馬料穀物に對して末鹽鈔が發行された京師物資發行の例であるし、又會要食貨三九市糴糧草天聖七年十一月三日の條に

三司言。西京管界今年大熟。欲許客旅於彼處入納諸色斛斗、依市價每十貫添^⑦七百文、令取便指射自京東京西及向南州軍見錢。如願要香茶及願末鹽白礬等交引、並聽。從之。

とあつて、「香茶及願末鹽白礬等交引」と記されているのは、西京洛陽納入の穀物に對し、商人の希望によつて、西京糧草交鈔からの振替手續を経て、茶鈔・願鹽鈔などと並んで末鹽鈔が發行された例であるし、又更に會要食貨三六權易天聖七年十二月の條に

三司言。……（中略）……。省司看詳元敕、蓋爲陝西沿邊州軍、地居山嶮、道路阻隘、所要糧草、難以幹運。是以驛晝、依每斗束確の見賣價錢、許客人便糧草、給付客人交引、上京請領見錢。如恐客旅情願便換外處州軍見錢、或算請

茶貨香藥象牙顆末鹽白礬取引、亦取客人自便、

とあるのや、同書同項同條にて三司が引用した天聖元年五月敕に

定奪所奏。陝西沿邊州軍、許客津般粮草赴倉場入納、乃以逐月逐旬每斗東確的見賣價錢紐計貫百、等第加饒給付取引、到京一文支還一文見錢。如情願便換外處州軍見錢、或算請茶貨香藥象牙顆末鹽白礬取引、亦取客人穩便、於在京權貨務、依入納見錢算買加饒則例、翻換取引文字、往指射去處請。

とあるのは、天聖年間を通じて、陝西邊境軍需糧草納入の糧草交鈔に對し、商人の希望によつては、茶鈔や顆鹽鈔などと並んで、末鹽鈔の振替・翻換發行が認められている例である。これらの末鹽鈔發行の例を見ると、天聖元年の末鹽鈔の京師現錢發行法の成立後も、それ以前の時期と全く變らずに、多角的な物資發行が行われているばかりか、更には邊境糧草交鈔を末鹽鈔に振替える所の翻換發行もが加えられて、京師現錢發行法はその當初から有名無實であつたかのように見える。もしその通りなら、これまで考察して來た末鹽鈔の京師現錢發行法は、財政原則の成立でも何でもなく、單なる場當りの財政操作であつたことになる。

しかしながら、これらの例をそのまま完全な末鹽鈔の物資發行法の存在や弊害多き翻換發行法の存在と見なし、京師現錢發行法の存在を輕視するのは誤りである。というのは、これらの例を良く検討すれば、これらは確に形式的には物資發行や翻換發行の例であることには間違いないが、内容的には或いは完全に現錢發行法に從屬するか或いは弊害なき翻換發行として、小さな分擔區分を與えられて存在しているに過ぎないことが知られ、これらの從屬的補助的運用が却つて現錢發行法の財政原則たる重みを認識させることとなるからである。稍具體的にこれらの例の内容を見よう。先ず、京師納入の馬料穀物に對する末鹽鈔の物資發行の例についてであるが、この場合には、臨時調達の馬料穀物に總額五十萬石の大枠があるばかりか、その内三割のみが末鹽鈔物資發行の枠であり、その上更に同額の現錢の「貼納」によつて、始めて末鹽鈔の發行が許可されるという付帶條件の積み重ねを看過してはならない。二重三重の條件を揃えて、やつと現錢發行に準

ずることが出来るのであるから、この物資發行はかりそめにも現錢發行と同等に運営されているとは言えない。對等の立場を持たぬ物資發行が、どうして現錢發行法を侵食してそれを有名無實とすることが出来るか。これは天聖年間の物資發行法の受けた嚴しい從屬的規制を示すと同時に、却つて現錢發行法の財政原則化を示す好例であるとも言える。次に、陝西糧草交鈔に對する末鹽鈔の翻換發行の例についてであるが、この場合には天聖年間を通じて、「依入納見錢算買加餽則例、翻換交引文字」とある記事に見られるように、この翻換發行は現錢發行法の加餽則例の適用を受けて、現錢發行と全く同等に扱われていることを看過してはならない。その加餽則例とは、具體的には先の京師納入の馬料に對する末鹽鈔の物資發行の記事に「在京入納見錢體例」と見えており、現錢發行の場合にだけ「每貫上加權錢八十文」の通常割増を與えるということなのである。物資發行が「貼納」などの嚴しい付帶條件を揃えて、やつと現錢發行に準ずる扱を受けるのに對し、翻換發行の方は何の付帶條件も無く直ちに現錢發行と同等の扱を受け、通常割増も與えられるのであるから、この翻換發行は物資發行よりも有利であつたに違いない。これは明きらかに、京師穀物納入などと比べて、陝西邊境軍需糧草納入を重視した表れではある。しかし、物資發行に比べて有利であるとは言つても、現錢發行と同等の扱を受けるというだけでは、やはり翻換發行は現錢發行法を侵食してそれを有名無實にすることは出来ない。というのは、翻換發行が現錢發行と同等の扱を受けるだけでは、陝西糧草交鈔の支拂を求める商人は、京師現錢支拂より末鹽鈔の翻換發行に乘替える商業的利益も全く無いので、翻換發行に殺到集中するいわれも無く、二者擇一の内すでに京師現錢支拂法によって保障されていて商業的利便にかなう現錢支拂を受けるのが常態となり、従つて翻換發行が現錢發行法を侵食することなどは起こり得ないからである。強いて末鹽鈔が入用ならば、殊更に翻換發行を受けなくとも、支拂を受けた現錢を再び納入して現錢發行を受けることも出来るし、それで何の損得も無い。つまり、現錢發行と同等の扱を受ける翻換發行とは、現錢支拂法の施行以前から翻換發行を受けていた商人に對する便宜的處置であり、糧草交換に對する京師現錢支拂法と末鹽鈔の京師現錢發行法とをつなぐ現錢收授の手續の繰り返しを若干の場合についてのみ簡略化したに過ぎぬことが知られる。

現錢收授の手續を簡略化する意味しか持たぬ翻換發行が、現錢發行法を侵食してそれを有名無實とするかもしれない理が知られよう。このような翻換發行の伸びなかつた具體的な證據は、先掲の會要食貨三六權易天聖七年十二月の條にて三司が引用した「在京權貨務及解州天聖六年正月一日至十二月終支過陝西沿邊州軍便糴糧草見錢茶鹽諸般交引錢」の總額二百四十七萬六千三百二十七貫二十六文の中、末鹽鈔の翻換發行を受けたのは僅かに九萬四千三百八十八貫七百文にしか過ぎぬ狀況であつたことから知られよう。此の陝西糧草交鈔に對する翻換發行の例は、これ亦天聖年間の末鹽鈔の現錢發行法の財政原則化を示す好例となると思われる。觸れ残したが、西京納入の穀物に對する末鹽鈔の發行については、具體的記事が無いので、その内容は定かではないが、これも陝西糧草交鈔に對する翻換發行と同等かそれ以下の扱を受けたものであろう。附言するが、末鹽鈔の翻換發行が現錢發行法を侵食するのは、それが現錢發行と同等の扱を受けた際ではなく、これまでの考察から見れば、明きらかに、糧草交鈔に對する京師現錢支拂法が運営難に陥つたり、或いは翻換發行の方に現錢發行より有利な優遇割増が付けられた際だけであることに留意しなければならない。このような天聖年間の弊害なき末鹽鈔の翻換發行法と康定・慶曆年間の優遇割増付き翻換發行法との比較については別に考察したが、ここでは現錢發行法の立場から、稍詳細に考察を整理したものである。要するに、天聖元年の末鹽鈔の京師現錢發行法の成立後も、なお若干の京師物資發行や糧草交鈔に對する翻換發行が行われていたが、物資發行は現錢發行と同等に扱われたものではなく、又翻換發行は現錢發行と全く同等に扱われたものの、それを選択する商業的利益が無かつたので、そのいづれも京師現錢發行法の存在を脅やかすものではなかつたということである。このような物資發行や翻換發行の運用は、明きらかに現錢發行法を財政原則とする財政當局の姿勢を示すものであり、この間に現錢發行法は定着の基盤を固めることとなつた。

このようにして末鹽鈔の京師現錢發行法が定着しつつあつた時期に、俄にその財政原則を緩めて、再び物資發行や現地發行を含む多元多角的發行法を採用する事態が生じた。それは、鹽法制度改革上著名な參知政事王隨の東南鹽法體制を抜本的に官賣鹽法から通商鹽法に改變せんとする建言に發するものであり、この建言は現實的でないとして否決されたもの

の、産鹽場における滯積鹽の存在などの官賣鹽法體制の澁滯弊害現象を除去するものとして、鹽の流通消費を一層促進するための末鹽鈔發行増大策が採用されたからである。鹽法體制全般にわたる高次元の政策検討の結果であるから、いかに定着しつつあったとはいえ、末鹽鈔の發行法の改變も止むを得ぬ所ではあったろう。長編卷一百十三明道二年是歳の條に久之積鹽復多。於是參知政事王隨建言、……（中略）……。願得權聽通商三五年、使商人入錢京師、又置折博務於揚州、使輸錢及粟帛、計直予鹽。……（中略）……。即詔翰林侍讀學士宋綬樞密直學士張若谷知制誥丁度、與三司使江淮制置使同議可否。皆以謂、聽通商、則恐私販肆行、侵蠹縣官。請敕制置司、益造船運至諸路、使皆有二三年之蓄、復天禧元年制、聽商人入錢粟京師及淮浙江南荊湖州軍易鹽。在通泰楚海眞揚漣水高郵貿易者、毋得出城、餘州聽詣縣鎮、毋至鄉村。其入錢京師、增鹽予之。

とあるのは、參知政事王隨の東南鹽法體制改變を意圖する建言を伝えると共に、それを否定した後の官賣鹽法振興策として、末鹽鈔發行額増大のための多元多角的發行法復活の實情を伝えるものである。「復天禧元年制、聽商人入錢粟京師及淮浙江南荊湖州軍易鹽」とある記事によって、天聖元年以降殆ど定着していた末鹽鈔の京師現錢發行法を緩和して、天禧元年創制期の多元多角的發行法に逆戻りしたことが知られ、又「餘州聽詣縣鎮、毋至鄉村」とある記事によって、末鹽鈔行使販鹽市場を州城大都市から密賣鹽混入の恐れのない縣鎮に至るまで擴大容認したことも知られよう。しかしながら、「其入錢京師、增鹽予之」の記事によって、多元多角的發行法とは矛盾する現錢發行保護の姿勢が、依然として殘存していることも見落としてはならない。これらの末鹽鈔發行額増大策によって、末鹽鈔發行額が増大するのは勿論のこととして、これと並行して、京師現錢發行を含む多元多角的發行法内の各々の發行額も、各々の商業的利便を背景として相當な伸長を見せそうなことも豫想されるであらう。

明道二年、こうして再發足した末鹽鈔の多元多角的發行法は、末鹽鈔發行額増大のための苦心の總合的鹽法政策であつたにもかかわらず、豫想に反して多元多角的發行の効果は薄く、僅か二年にして破棄され、再び京師現錢發行の一本来に

統合されてしまった。宋史食貨志下四鹽中淮南鹽の項の明道二年參知政事王隨建言に續く條に

景祐二年。諸路博易無利、遂罷。而入錢京師如故。

とあるのは、折角の多元多角的發行法の一方の柱である京師現錢發行ばかりが伸びて、他方の柱である筈の現地物資發行は極端な低迷を續けたために、遂に現地物資發行は廢止され、京師現錢發行のみが残ったことを傳えるものである。「諸路博易」即ち末鹽鈔の現地物資發行が低迷し京師現錢發行のみが増大したことは、他にも文獻通考卷十五征權考二鹽鐵の項の「五代時鹽法太峻」の條に付された止齋陳氏曰の記事に

京師歲入見錢、至二百二十萬。諸路斛斗、至十萬石。「見是年（景祐二年）八月淮南江浙荆湖福建等路提舉鹽事朱某奏。」

とあることから、甚だ具體的に知られる。この記事の利用には若干の考證も必要であるが、末鹽鈔の京師現錢發行額は天聖末年の百八十萬貫から二百二十萬貫にも増大しているのに、現地物資發行額の方は僅か穀物十萬石に止まっていることに留意しなければならない。一方の柱である現地物資發行が僅かに十萬石即ち現錢換算數萬貫に止まる状況では、多元多角的發行法の精力的運用の意義は無く、再び京師現錢發行法の一本に統合されたのも止むを得ぬ觀がある。このような多元多角的發行法の推移の過程に、その他の京師物資發行や現地現錢發行などの存在が見えないのは何故であろうか。恐らく、京師物資發行は「其入錢京師、增鹽予之」とある京師現錢發行保護策によって抑えられたのであろうし、現地現錢發行は東南地方廣域商業の商機に合わぬから伸びなかつたのであろう。折角の末鹽鈔發行額増大策も、京師現錢發行と現地物資發行との二本立てのみの運用では、多元多角的發行法と言わなくても良さそうである。結局、鳴り物入りで開始された明道二年の末鹽鈔發行額増大策は、その手段とした多元多角的發行法の面では失敗したが、その目的とする末鹽鈔發行額増大の面では、京師現錢發行の伸長による數十萬貫の發行増大を得て、相應の成果を収めたこととなる。ところで、多元多角的發行法が失敗し、京師現錢發行のみが成長した理由は何であつたろうか。多元多角的發行法下において、それま

での京師現錢發行法による現錢收入の急減を恐れた官司が、京師現錢發行のみに對し「其入錢京師、增鹽予之」の稍矛盾する保護策を加えたことが、京師現錢發行の伸長に影響を與えたのは確かであるが、それが京師現錢發行と競合する京師物資發行にとっては不利であつても、遙か東南地方に行われてこれと競合關係の薄い現地物資發行をも抑制低迷させる影響力は無さそうである。何が本質的に京師現錢發行を維持成長させ、現地物資發行を低迷させたのか。京師現錢發行の成長の趨勢と現地物資發行の低迷との對照は餘りにも顯著であるが、これは南北廣域流通經濟の問題であると言ふことにする。ともかく、此の末鹽鈔發行額増大策の結果、縣鎮に至るまで擴大された販鹽市場は總べて京師現錢發行の末鹽鈔の販鹽市場となり、京師現錢發行法は従前よりも更に成長を遂げ、いよいよ末鹽鈔發行の財政原則として定着する基盤を固めることとなった。

以上は要するに、天禧元年の官賣法下末鹽鈔制度の創制後、特にその頭角を現わしていた京師現錢發行法が天聖元年には末鹽鈔の原則的發行法となるが、その後も折にふれて便宜的に運用される多元多角的發行法や翻換發行法の複合交錯する中で、他の發行法より優れた財政的・經濟的利便により、遂に末鹽鈔發行法の財政原則として定着する過程を考察したものである。

二 末鹽鈔の優遇翻換亂發と京師現錢發行法への回歸

末鹽鈔の京師現錢發行法は、天聖年間を経て景祐年間に至る頃には、末鹽鈔發行法の財政原則として完全に定着する趨勢にあった。此のような現錢發行法の安定を俄に覆したのは、寶元二年末に勃發した對西夏戰による中央財政難であり、陝西糧草交鈔に對する京師現錢支拂法の破産を補う末鹽鈔の優遇翻換發行の開始であつた。緊急軍事による財政難にあつては、末鹽鈔のみならず茶鈔・解鹽鈔などもまた優遇翻換發行を強いられることとなつた。この結果、京師現錢發行法は全く有名無實となり、これより後は十年間の末鹽鈔の發行は殆ど糧草交鈔に對する優遇翻換發行のみとなつた。宋史食

貨志下四鹽中淮南鹽の項に

康定元年、詔。商人入芻粟陝西並邊願受東南鹽者、加數與之。

とあるのは、陝西糧草交鈔に對する末鹽鈔の優遇醵換發行の開始のことを傳えるものであるが、「加數與之」の記事に見られるように、陝西糧草交鈔に對してこれまでに無かつた優遇割増を與えて、末鹽鈔の醵換發行を行おうとしているのは注目を要する。これは明きらかに、軍需増大によつて激増した陝西糧草交鈔に對する支拂が、最早京師現錢支拂法では支拂困難に陥つたので、その支拂澁滞を避ける爲に、末鹽鈔の醵換發行に代替させようとしているのであるが、先に天聖年間の醵換發行の例で見たように、京師現錢發行と全く同等の條件では醵換發行は伸びるわけもないから、通常割増とは比較にならぬ程の優遇割増を加えたのであることが知られる。この優遇割増の利に動かされて、京師現錢支拂を延滞されていた糧草交鈔は一齊に醵換發行へと流れたので、末鹽鈔の優遇醵換發行は忽ちにして京師現錢發行を凌駕して、醵換亂發の途を突つ走ることとなつたのであろう。宋史食貨志のこのような記事に續いて

慶曆二年、又詔。入中陝西河東者、持券至京師、償以錢及金帛各半之。不願受金帛者、予茶鹽香藥惟其所欲。而東南鹽利厚、商旅皆願得鹽。

とあるのは、その二年後の慶曆二年になると、末鹽鈔の優遇醵換發行だけでは糧草交鈔に對する支拂延滞を解消することにも困難になつたのか、更に茶鈔などの醵換發行をも再開したことを傳えるものと思われる。この期に及んでは、「持券至京師、償以錢及金帛各半之」とある記事は餘りにも白々しく、それは單に糧草交鈔に對する「錢及金帛」による京師現錢支拂法の原則を述べたに止まり、運営不能に陥つた現錢支拂法に替つて、茶鹽交鈔類の優遇醵換發行が殆どの支拂を賄つていたものと思われる。このようにして盛大に開始された茶鹽交鈔類の優遇醵換發行法によつて、京師現錢發行法は全く有名無實の存在となつたのは間違いない。この優遇醵換發行法の盛況の上に、更に康定元年・慶曆二年の兩次には若干量の河北内地三說法による末鹽鈔の醵換發行が行われ、慶曆八年よりは陝西糧草交鈔に匹敵する程に大規模な河北四說法に

よる轉換發行が開始された。^⑨かくも重複施行された陝西・河東・河北糧草交鈔に對する交鈔類の轉換發行は、最早轉換亂發と言ふべきであらう。京師現錢發行法は完全に衰止したのは當然であり、茶鹽交鈔類亂發の財政的經濟的弊害は目を覆うばかりとなった。先掲の宋史食貨志の記事に續いて

八年（慶曆）、河北行四說法、鹽居其一。而並邊芻粟、皆有虛估騰踴至數倍、券至京師、反爲蓄買所抑、鹽八百斤舊售錢十萬、至是六萬。商人以賤估售券取鹽、不復入錢京師、帑藏益乏。

とあつて、「不復入錢京師」とあるのは、既に慶曆初年の頃にも殆ど衰微していたと思われる末鹽鈔の京師現錢發行法の狀況を、河北四說法による弊害の敘述の際に、遅まきながらも傳えたものである。

さて、康定・慶曆年間に盛況を極めた茶鹽交鈔類の轉換發行は、糧草交鈔に對する過度な邊上加擡や優遇割増や更には正常な商業的需要を大幅に超える茶鹽交鈔類の亂發によつて、茶鹽などをめぐる財政・經濟に重大な損失や弊害を與え、その弊害現象は年月の経過と共にいよいよ深刻となり、皇祐年間の初年にはその弊害狀況は誰の目にも顯然となった。このような茶鹽交鈔類をめぐる財政・經濟の荒廢を迎えた原因は、政治的には對西夏戰にあり、財政的には轉換亂發にあるのは明きからであるから、對西夏戰の收束によつて財政再編の機運が高まると、その目標は當然茶鹽交鈔類の轉換亂發の修正・廢止に向けられて来る。この茶鹽交鈔類の轉換亂發に替るべき中央財政運用策として、再び邊境糧草交鈔に對する京師現錢支拂法や茶鹽交鈔類の京師現錢發行法の復活が立案遂行されたのは、あくまでも對西夏戰前の末鹽鈔の京師現錢發行法などの實績であらう。此のような皇祐年間の財政環境の下で、陝西糧草交鈔とこれに對應すべき解鹽鈔について、有名な范祥の鹽法が現錢支拂法と現錢發行法を基本原則の一つとして立案施行されると共に、一方では、主として河北糧草交鈔とこれに對應すべき末鹽鈔について、これ又經驗上財政經濟的利便度の高い京師現錢支拂法と京師現錢發行法の復活が立案されることとなった。これより急速に、陝西糧草交鈔に對しては解鹽鈔の收入が充てられ、河北糧草交鈔に對しては末鹽鈔の收入が充てられる對應區分が行われるようになり、末鹽鈔創制初期の頃の多元多角的發行や轉換發行のよう

な幅のある財政操作の餘地は少なくなった。この對應區分はやがて夫々の現錢收支對應均衡策となるが、茶鈔の運用再編はこれより稍遅れたようである。ともかく、主として河北糧草交鈔と對應することとなった末鹽鈔の京師現錢發行法の久方振りの復活については、皇祐二年より檢討立案が開始された。宋史食貨志下四鹽中の淮南鹽の項に

皇祐二年、復入錢京師法、視舊錢數、稍増予鹽。而並邊入中先得券受鹽者、河東陝西入芻粟直錢十萬止給鹽直七萬、河北又損爲六萬五千。且令入錢十萬於京師、廼聽兼給。謂之對貼。自是入錢京師稍復故。

とあつて、「復入錢京師法」とあるのは、明きらかにそれまでの邊境糧草交鈔に對する末鹽鈔の翻換發行法を廢止して、末鹽鈔の發行は京師現錢發行法に回歸せんことを意圖した政策の内容を傳えるものである。

しかしながら、末鹽鈔の翻換發行法から京師現錢發行法への回歸は、さほど簡單ではない。というのは、河北糧草交鈔の支拂に對應させられている末鹽鈔は、その京師現錢發行法の實施と同時に、商業的需要による限られた現錢收入を以て、一方では河北糧草交鈔に對する京師現錢支拂を負擔すると共に、他方では翻換發行の廢止によつて延滞される既發行の亂發糧草交鈔に對する支拂も負擔せねばならないからである。事實この記事に見られるように、巨額の河東・陝西・河北糧草交鈔がその支拂を求めて山積していた。しかも、京師現錢發行法が完全に回復するまでの當座の支拂や延滞糧草交鈔に對する支拂などを肩替りする巨額の財源などは無い。此のような財政狀況で立案されたのが、この記事に見られるような末鹽鈔の京師現錢發行と「對貼」發行との併用策であつた。對貼とは、既發行の亂發糧草交鈔をその發行地によつて額面の七割乃至六割五分に評價し直し、その評價額によつて依然として末鹽鈔を翻換發行するが、その付帶條件として、別に額面通りの額の末鹽鈔の京師現錢發行を抱き合わせるものであることがわかる。天聖年間の多元多角的發行法の一つたる京師物資發行にて見られた「貼納」と全く同様な制度であることが知られよう。このような京師現錢發行と對貼發行との併用策が順調に進展すれば、一方では、「視舊錢數、稍増予鹽」とある特別割増にも勧誘されて、末鹽鈔の京師現錢發行は次第に回復し、河北糧草交鈔に對する支拂にも對應出來ると共に、他方では、對貼發行は延滞する巨額の糧草交鈔を

末鹽鈔の轉換發行によって漸次消化しつつ、同額の對貼現錢收入も得て、一層延滯糧草交鈔の解消に資することとなるであろう。この間、河北糧草交鈔の新規發行は必要最低限に抑えられていたの言うまでもない。このように見て來ると、皇祐二年に立案され皇祐三年から實施された京師現錢發行と對貼發行の併用策は、明きらかに末鹽鈔の轉換發行法より京師現錢發行法への回歸の爲の過渡的政策であつて、巨額の延滯糧草交鈔に對する對貼發行や現錢支拂が完了した時點では、京師現錢發行法とそれに對應する京師現錢支拂法が完全に對應均衡を回復するものであつたことが知られる。「自是入錢京師稍復故」とあるのは、その過渡的過程が逐次進行して行つたと解しても良さそうである。

ともかく、皇祐三年正月より實施された末鹽鈔の京師現錢發行及び對貼發行の併用策は、その目的とする末鹽鈔の京師現錢發行法と河北糧草交鈔に對する京師現錢支拂法との對應均衡の復活までには數年の日月を要したのは確かである。著しく惡性化した轉換亂發に對し、內藏庫よりの若干の融通を除けば大した別途財源も無く、對貼という制御によって延滯する巨額の糧草交鈔を消化し盡さねばならぬのであるから、當然の日月ではあつたろう。しかも、轉換亂發によってこれまで利益を得て來た商人層や或いは俄な對貼の施行によつてこれから不利益を被る商人層の抵抗による對貼發行の停滯遅延も考慮に入れねばならない。對貼は財政再建に實效のある措置ではあつても、商人層にとっては不利益なのは明きらかである。會要刑法二刑法禁約皇祐三年二月十九日の條に

詔。近侍之臣、考決大議、令利害曉白。尙慮、輕肆之人、陳舞空言、幸撓其端。夫利百而法乃變、令下而議不起。然後民聽不眩、而憲度行焉。自今有依前項事爲議者、並須究知厥理審可施用。若其事已上而驗問無狀、一當施之重罰。時河北入中糧草、既更用見錢法。恐要利者扇其事故下是詔。

とある記事は、皇祐三年正月の對貼及びそれに連なる京師現錢收支對應均衡策の實施の直後に、高官連がその故なき更改を上言することを特に禁止したことを伝えるものであるが、如何に對貼の運用に反對や抵抗が多かつたかを窺わせるものである。恐らく、かつての茶法改革の際などにもしばしば見られたように、大商人層が側近官僚や政府高官などを動かし

て、對貼の改廢などを劃策したこともあったであろう。それにもかかわらず、交鈔類をめぐる京師現錢收支對應均衡策は、對貼を先兵として強行實施する外は無かつたのであるから、如何に飜換亂發の弊害は大きく、財政當局はその弊害を骨身に浸みて知つたかが知られると思う。皇祐年間の財政對商人層の短期的利害の對立は相當のものであったのである。

ここで留意すべきは、對貼を不利益とするか或いは對貼現錢が無くて、何時迄も對貼發行に應じなかつた糧草交鈔はどうなるのかという問題である。その場合、それらの糧草交鈔は遂には無効となるのではなくて、飜換亂發期には有名無實となつていたが、その額面通りに京師現錢支拂を受ける權利が残つたことは間違いない。ただ對貼に應ぜぬ限りは、その發行年月順序に従ひ、京師現錢收入の蓄積を待つて、不定期間の長期延滞を覺悟せねばならぬのであろう。ここに、相當巨額の糧草交鈔が、六割五分に評價される不利益な對貼發行に走らず、長期間の延滞に耐えた理由がある。このような次第で、皇祐三年正月の對貼發行の開始にもかかわらず、末鹽鈔の對貼發行を求めぬ糧草交鈔は、至和年間を経て嘉祐初年に至るまでの五・六年間も、常に相當額の延滞を續けた。對貼に應ずる糧草交鈔が少なければ、それだけ京師現錢支拂額が増す理であるから、京師現錢收支均衡への過渡的時期は更に長引き、京師現錢支拂を監督管掌する三司・榷貨務は京師現錢收入の確保・增收に長く苦慮奔走せねばならぬこととなる。長編卷一百七十六至和元年八月癸巳の條に

出内藏庫錢二百萬緡、令入内供奉官勾當御藥院張茂則、置司以市河北入中軍糧鈔。先是上封者言、河北入中軍糧、京師給還緡錢綢絹。商人以算請久未能得、其鈔每百千、止鬻六十千。云々。

とある記事は、皇祐三年正月より三年有餘を経た至和元年八月にても、依然として巨額の河北糧草交鈔が延滞し續け、換金を急ぐ商人は、額面六割五分の對貼發行を受けるよりも、その六割の六十貫程度で賣却していたことを傳えるものである。この間にも、長編卷一百七十二皇祐四年三月壬戌の條に

出内藏庫絹十萬、下三司以助軍費。

とあるのや、同じく長編卷一百七十三皇祐四年七月乙巳の條に

出内藏庫錢三十萬緡絹十萬匹、下河北助羅軍糧。

とあるのや、同じく長編卷一百七十五皇祐五年七月丙子の條に

出内藏庫緡錢十萬緡絹二十萬綿十萬、下河北助羅軍儲。

とあるのや、同じく長編卷一百七十六至和元年六月甲寅の條に

出内藏庫緡絹五十萬緡錢三十萬、下河北助羅軍儲。

とある記事などを見れば、河北糧草交鈔に對する支拂に追われた三司が、内藏庫より特別の資金融通を受けて京師現錢收入の不足を補っていたことが知られよう。これらの内藏庫よりの融通資金が、延滯糧草交鈔に對して支拂われたのか、或いは新規糧草交鈔に對して支拂われたのか、この記事だけでは判然としかねるが、その多額とは言えぬ融通額から見れば、緊要性の高い新規糧草交鈔の方に支拂われたものと思われる。このように、河北糧草交鈔の新規發行を著しく抑制し、更には内藏庫より連年の融資を受けているのにもかかわらず、なお巨額の糧草交鈔の延滯を續けるということは、依然として末鹽鈔の對貼發行や現錢發行が伸びず、従つて京師現錢收入もなかなか回復しなかつた情勢を示すばかりか、更には新規糧草交鈔もまた延滯しかねない財政緊迫の状況にあつたことも示すものである。對貼發行や現錢發行が伸びなかつた原因は、明きらかにそれを不利益とする商人層の相當な抵抗があつたのも確かなようであるが、根元的には、それまでの飜換亂發によつて、東南地方現地に末鹽鈔の甚しい流通過剩の現象があつたことも忘れてはならない。^⑥末鹽鈔の飜換亂發の積年の弊害を一掃し京師現錢收支對應均衡策を回復するのには、河北糧草交鈔の新規發行を抑制合理化し、延滯糧草交鈔を解消し、末鹽鈔の現錢發行を回復するなどの施策の外に、更に東南現地における末鹽鈔の滯積解消も圖る必要があつたのである。三司は、財政的手詰りの苦しい状況に置かれていた。

しかしながら、三司は良く此の財政的苦境にも耐えた。それは、天子の特別な禁令にも象徵されるような此の財政問題に關する朝廷の固い結束にもよるが、長編卷一百六十九皇祐二年八月癸亥の條に

出内藏庫絹一百萬、下河北都轉運司、權易大名府路安撫司封樁錢、市糴軍儲。仍遣權度支判官屯田員外郎董沔、往計置之。

とあるように、先ず對貼の施行に先立って、三司が内藏庫よりの融資を得て、河北内地に多量の糧草を調達準備したことに負う所がある。これに加えて、對貼施行以來連年の内藏庫よりの融資によって、新規糧草交鈔の完済を繼續し得たと思われる効果が大きく、更には、長編卷一百七十七至和元年十一月甲子の條に

詔三司。河北歲大豐。其令緣邊州郡便糴軍糧三百萬馬料三百萬。

とあるように、河北邊境における大規模な新規糧草調達を内藏庫の融資も得て實施した効果も著しく大きかったと思われる。このような河北邊境糧草調達と京師現錢支拂の相關的運用の効果が蓄積された上に、三年有餘の停滯の後、漸く東南現地の末鹽鈔滯積が疏通して、京師現錢發行が伸び始めると、さしもの財政的難局にも曙光が見え、京師現錢收支は擴大均衡の様相を見せ、延滯糧草交鈔には對貼による末鹽鈔の轉換發行を受けるか、或いは餘裕の出來た京師現錢支拂を期待するかなどの延滯解消の動きが見え始めた。京師取引舗などにおける延滯糧草交鈔の取引が高値含みで動き始めたと思われるのも此の頃からであろうか。一部分のみ先掲の長編卷一百七十六至和元年八月癸巳の條に

出内藏庫錢二百萬緡、令入内供奉官勾當御藥院張茂則、置司以市河北入中軍糧鈔。先是上封者言、河北入中軍糧、京師給還緡錢綱。商人以算請久未能得、其鈔每百千、止鬻六十千。今若出内藏庫錢二百萬緡、量增價收市之、歲可得遺利五十萬。上以爲然、故委茂則幹其事。既而知諫院范鎮言、内藏庫權貨務同是國家之物。豈有權貨務因欲滯商人算鈔、而令内藏庫乘賤以買之。與民爭利、傷體壞法、莫此爲甚。上諾鎮言、遽罷之。

とある記事は、一見、依然たる河北糧草交鈔の延滯狀況を傳えただけであるかのように見え、又或いは、折角内藏庫が巨額の資金を放出して延滯緩和をも圖ろうとしているのに、頑固な諫官の形式論によって中止されたかのように見え、又更には、この内藏庫の買上げ中止によって、糧草交鈔の延滯は未永く續いたかのように見えなくもない。しかしながら、此

の記事はその表面には隠れているが、懸案の糧草交鈔の延滞解消や京師現錢收支均衡の回復などの動向を良く伝えるものであることを見抜かなければならない。そこで、先ずこの記事の表面的内容についてであるが、これは、天子の承認を得た側近宦官が、恐らく内蔵庫宦官とも協力し、内蔵庫の二百萬貫もの巨額現錢を一舉に放出して市價低落の延滞糧草交鈔數百萬貫を市價より高値で買上げ、それによって糧草交鈔の延滞を緩和すると共に、併せて略五十萬貫の巨利を擧げようとしたのに、施行直前に及んで諫官范鎮の強硬な諫言により中止されたことを伝えるものであることには變りはない。額面百貫の糧草交鈔を市價六十貫にて買収すれば、百萬貫を超える差益が見込まれる筈であるが、買收價格や賣却價格を量増・量減する必要があるので、差益五十萬貫以上という予想にしたのであろう。さて、内蔵庫はこうして安價に買収した延滞糧草交鈔を適當な時期に賣却して、初めてその差益が得られるのであるが、長年延滞を續けて來た糧草交鈔を將來更により高値で賣却する相手がいるのであろうか。明きらかに、この内蔵庫出向の官司に後の開封府都鹽院の鹽鈔賣買のような機能を期待するのは無理であるから、その相手は商人ではなく、三司・榷貨務の外には考えられない。それも、必ずや延滞糧草交鈔に對する最終的支拂を待つて、榷貨務に呈示し額面通りの現錢支拂を受けて差益を實現するものであるに違いない。ところで、このような延滞糧草交鈔の賣買による收益が、近い將來に果たして期待出来るのであろうか。延滞糧草交鈔にそのような價值があるのであろうか。此の觀點から、初めてこの記事の表面には見難い意味が察知されるのであり、延滞糧草交鈔の微妙な評價乃至は市況の變化や更には延滞解消の動向などが察知出来るのである。そこで、この記事の裏面的内容についてであるが、元來三司がその延滞解消に數年がかりの努力を拂つて來たのに、事もあろうにその錢帛融通を常に澁つて來た内蔵庫が横から直接乗り出し、而も延滞緩和をも裝つて、數十萬貫の營利を圖るとは何事であらうか。これは、李燾が「言利者欲革之」と誤認しているような延滞の改革・解消などではなく、暴利狙いの投機以外の何物でもない。天子が不明を恥じて、中止したのも當然である。これが投機であつたか無いかはともかくとしても、ここで特に注目すべきは、これまで數年の延滞を續けて甚だ危險度の高い糧草交鈔の買收に、空前とも言うべき二百萬貫もの巨

額現錢を一舉に投入せんとした内藏庫宦官の姿勢である。この内藏庫宦官の延滞糧草交鈔に對する評價から、延滞糧草交鈔の市況變化に關する重大な情報を読み取れよう。それは、遠からずして延滞糧草交鈔がその支拂を受けて解消するであろうという事實である。而も「歲可得遺利五十萬」とあるのを穿つて察すれば、その期限は來年中とまで豫想されることである。この延滞糧草交鈔解消の動向に關する情報は、恐らく權貨務の末鹽鈔現錢發行や京師現錢收支の著しい回復の資料から洩れたことであろうし、更には既に京師交引舗などにも察知され、早くも延滞糧草交鈔の市價回復として現象しつつあったのかも知れない。ともかく、内藏庫宦官の糧草交鈔巨額買上げ案は、このような情報の上に立案された收益案であつたことには間違ひあるまい。確實な情報と事實の裏付けなしに、二百萬貫もの巨額現錢を延滞糧草交鈔などに放出するわけは全く無いからである。このようにして、此の記事の表面には隠れているが、糧草交鈔の延滞解消は目前にその仕上げる段階を迎え、末鹽鈔の京師現錢發行法や京師現錢收支均衡の回復は最早時間の問題であつたことが知られるのである。此の記事が數少い絶好の資料でなくて何であらうか。それにしても、内藏庫現錢二百萬貫の放出による延滞糧草交鈔買上げ案は、交引舗の投機に似ている。元來、内藏庫は天子個人の内庫ではあるが、官庫であることに變りはない。三司・權貨務が止むを得ず財政再建のために棚上げ延滞し市價下落させた糧草交鈔を、その官庫が安價に買收し營利を圖るといふのでは、天子の政治姿勢を矛盾させるのは確かである。かかる巨額資金があるのならば、もっと早期に三司に一括融通して延滞解消を圖るべきであつたということにもなる。折角の糧草交鈔延滞を緩和し、小商人には市價より高く買上げ、且つ内藏庫の巨額収益ともなる一石三鳥の名案も、放棄されたのは止むを得ぬ所ではあつた。恐らく、交引舗などの投機商人は程なく巨得を得たのであらうが、知諫院范鎮の諫言は形式論のみではなかつた。

稍資料内容紹介と解釋に手間をかけたが、至和元年の終り頃にもなると、三司・權貨務の數年がかりの努力の結果、糧草交鈔の延滞解消や對貼の收束・京師現錢發行法の完全回復や更には京師現錢收支對應均衡策の回復は目前にあつたことが認められると思う。それでは、實際のその回復實現は何時であつたらうか。長編卷一百八十一至和二年十一月己未の條

に

初虞部郎中薛向言河北糴法之弊以爲。被邊十四州悉仰食度支、歲費錢五百萬緡、得米粟百六十萬斛、其實才直二百萬緡爾、而歲常虛費三百萬緡、入於商賈蕃販之家。今既用見錢實價、革去三百萬虛加之弊矣。然必有以佐之、則其法可行。

とある記事に、對貼に始まる京師現錢收支均衡の回復策の立案施行者であつた薛向が、「今既用見錢實價、革去三百萬虛加之弊矣」と述べているのは、明きらかに京師現錢收支對應均衡策の回復が、至和二年末の頃には實現したことを傳えている。こうして回復した京師現錢收支對應均衡策は、その後は前にも増して安定度を深めることとなつた。長編卷一百八十六嘉祐二年十一月癸酉の條に

置江淮南荊湖制置司勾當運鹽公事一員。初三司言、商旅于權貨務入見錢算東南鹽歲課四百萬緡。諸路般運不足而課益虧。請選官置司以主之。

とある記事は、至和二年に續く嘉祐初年の頃には、年間四百萬貫の空前の巨額にも達した末鹽鈔京師現錢發行法の昂進ぶりを傳えるものであり、また范仲淹の樂全集卷二十三論京師軍儲事の章に

臣慶曆五年、權三司使。自慶曆及今通十年之比、計所虧耗、五分之二。爲國遠慮、竊所寒心。……（中略）……。一、裏河折中倉。本是在京便糴、以添助軍儲。隨時立法、旋行拋數。然於邊糴輕重有妨。以此便入不能及數。……（中略）……。今在庫香藥闕少、又江湖末鹽、自是見錢之法、邦計所賴。諸山場茶貨、已充河北糧草支用。若更將折中行使、必亦利害相攻。故不若坐倉收糴事簡而利博也。

とある記事に「江湖末鹽、自是見錢之法、邦計所賴」とあるのは、嘉祐初年の頃には、末鹽鈔の京師現錢發行法による現錢収入が、邦計即ち國家財政の糧草交鈔支拂の主柱となつて、京師現錢收支對應均衡策を支えていたことを傳えるものである。

結 語

要するに、茶鹽交鈔類の京師現錢發行法や糧草交鈔に對する京師現錢支拂法などによって、一度びは天聖初年に形成された京師現錢收支對應均衡策は、康定・慶曆年間の糧草交鈔に對する茶鹽交鈔類の轉換亂發によって完全に崩壊したが、皇祐三年正月よりの末鹽鈔の對貼・京師現錢發行の併用策によって、再び至和末年の頃には復活されることとなった。ただ、この度の京師現錢收支對應均衡策が康定・慶曆より以前のそれと大きく異なる所は、前者が北邊全面の糧草交鈔に對する京師現錢支拂法と茶鹽交鈔類の京師現錢發行法との総合的な對應均衡策であつたのに、後者の方は、范祥の解鹽法が陝西方面を分擔したことと戦後の茶鈔行使が急激に衰退したことによつて、河北糧草交鈔に對する京師現錢支拂法と末鹽鈔の京師現錢發行法との對應均衡策になつたという所である。こうして、再び形成された京師現錢收支對應均衡策は、末鹽鈔の京師現錢發行法が收入面の主柱となつて、北宋末期の蔡京の通商鹽法に至るまで、一貫して長期安定的に運營維持されることとなつた。嘉祐年間以降の末鹽鈔の京師現錢發行法と京師現錢收支對應均衡策の行方については續稿の豫定である。

註

① 東南官賣鹽法體制の成立の梗概については、拙稿「北宋時代東南鹽の官賣法の推移について」（東方學第三四輯）の「官賣法の成立」の項参照。

② 官賣法下末鹽鈔については、拙稿①及び「北宋時代の東南官賣下末鹽鈔について」（北九州工業高等專門學校研究報告第一號）、「北宋の東南地方に於ける官賣法下末鹽鈔制度の成立について」（青山博士古稀記念宋代史論叢）参照。

③ 佐伯富「宋代仁宗朝における茶法について」（岡山史學第一〇號）参照。

④ 宋史本紀卷九仁宗一天聖元年五月甲子の條に「行陝西河北入中芻糧見錢法」とあるのを参照。

⑤ 拙稿「北宋の東南地方に於ける官賣法下末鹽鈔制度の成立について」（青山博士古稀記念宋代史論叢）参照。

⑥ 末鹽鈔の轉換發行については、拙稿「北宋慶曆年間の官賣法

下末鹽鈔制度の混亂について」(九州大學文學部史淵第一二三輯) 參照。

⑦ 原典には明らかに脱字が認められるので、「添」を假に挿入しておく。

⑧ 註⑥に同じ。

⑨ 王隨の通商鹽法建言の意義影響については、拙稿註①參照。

⑩ 原典には「監」とあるが、宋史食貨志下四鹽中の略同文記事により訂正す。

⑪ 長編卷一一〇天聖九年四月辛巳の條に「在京榷貨務入末鹽錢、歲以百八十萬三千緡」とあるのを參照。

⑫ 原典には「東」とあるのを訂正。

⑬ 河北三說法四說法の推移については、拙稿「北宋慶曆年間の官賣法下末鹽鈔亂發の影響について」(九州大學教養部歴史學地理學年報第一號) 參照。

⑭ 原典には「鹽百八斤」とあるのを訂正。

⑮ 註⑬の拙稿參照。

⑯ 長編卷一六八皇祐二年正月壬子の條の末尾の註に編者李燾が「三年正月始復行見錢」としている繫年は正しい。

⑰ 註⑬の拙稿の三、東南官賣鹽法體制に與えた影響の項參照。

**On the Issuance of *Mo-yen-ch'ao* 末鹽鈔 under *Kuan-mai-fa*
官賣法 in Exchange for Cash in the Northern Sung 北宋**

Tōru Yuki

In order to be prepared against the Khitan 契丹 who had been a threat since the Five Dynasties, throughout the Sung several tens of thousands of troops were sent to the northern border region. Supply requirements for these troops exceeded 10,000,000 *kuan* 貫 each year. The central government's economic responsibility was for 3,000,000 *kuan* of it, but this money was not sent to the North; it was paid in the capital of K'aifeng 開封 for promissory notes which were issued to merchants who in turn supplied the necessary provisions for the troops in the North. From the beginning of the Sung, the greater part of this payment process was done with notes for such commodities as spices and drugs, as well as tea and salt. However, because of the system whereby *mo-yen-ch'ao* under *Kuan-mai-fa* which were salt notes used in the salt monopoly in the South of China, were issued in the capital in exchange for cash, when salt revenues in K'aifeng increased, payment came to be carried out in the financially more advantageous medium of cash.